
小さな女王

noracroix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな女王

【Nコード】

N1401W

【作者名】

noracroix

【あらすじ】

とある小さな国の小さな女王が日本へ来日。
警備の目を盗み日本の地で一人冒険へ出た。
そして辿りついた古びた小さな映画館。
そこで体験した少女の出来事。

三題噺で創作に挑戦。

今回の題目は『映画館』『山』『女王』です。

とある小さな国の小さな女王が日本へ来日した。

彼女は六歳で女王の地位に即位。

前の国王が若くして病に倒れ、崩御したからだ。

小さな女王は現在十歳。

普通の子供なら遊び盛りの歳。

しかし、女王に戴冠してからは毎日のように公務に追われていた。日本は安全な国という評判は前々から聞いている。

我慢の限界を越えていた小さな女王は、警備の目を盗み日本の地で一人冒険へ出た。

光沢のある白地の生地に精巧な刺繍がほどこされたドレス、それとブロンドの髪をなびかせ街の中をあちこち駆け回り、たどり着いた場所は古びた小さな映画館。

入り口は開いていた。入ってみると、受付の店員もロビーにお客さんも誰も居ない。

館内は薄暗く、僅かな照明と非常口への案内表示が灯るだけだった。

異国の女王にとってはただの謎の館。

ドキドキする不安とワクワクする期待を胸に、小さな女王は探検して回る。

椅子が多く並ぶシアター、長くどこまでも続いて見える通路。

赴くままに足を向け、緑色に光る誘導灯だけが照らす階段を上った先に着いた場所。

重く頑丈そうな鉄の扉の隙間から漏れ出す光。

僅かな光が真っ暗な暗闇の中で道しるべとしてそこへ導いていた。通路はもつと奥まで続いているが、漆黒の闇で完全に閉ざされている。

お化けがでそう。多感な子供であればそう思うだろう。

異国の女王はどんなお化けを想像しただろうか。

暗闇から目をそむけ、僅かな光をもたらず扉を見つめる。

扉の奥からカタカタタツと聞こえる慣れない音が少女の好奇心を誘う。

度胸は女王として生まれ持った少女の素質だったのかもしれない。恐怖を押しつける好奇心が、扉へと少女を運んだ。

ドアノブを回して引いてみるが開かない。

今度は思いつきり体重をかけて引つ張ってみた。

ぎぎ……ぎぎ……。

扉はゆっくりと開き、わずかに開いた。

その小さな隙間を子猫のようにするりと通り抜け部屋の中へ滑り込んだ。

部屋は白熱灯で照らされ、なんだか少し蒸し暑く、それに狭い。

壁は真っ黒に塗装されていて、余計に暑さと狭さを感じてしまう。

それにポリエステル樹脂と油が混じったような臭いが鼻をつく。

部屋の真ん中、壁際の方に木製の机が二つあり、それぞれに何かの機械が乗せられている。その機械についている車輪のような部品がくるくる回って、カタカタツという音を出していた。機械の向こうにガラスの窓があり、その向こうには座席が整然と並んだシアターが見える。

「おやおや、可愛いお客さんのおでした」

低い濁声。でも優しいような老人の声。

珍しい機械に気をとられていた少女は、部屋の隅にいた白髪で、どこに何本もしわを寄せたおじいさんに気がつかなかった。

「あーれまー。べっぴんな外国のお嬢さんでねーの。おかーさんとはぐれたんかい？」

不意に声を掛けられてビックリして固まる少女へ近寄り声を掛けるおじいさん。

異国の言葉は少女には理解できない。

さっきは突然だったので驚いたが、すぐに少女は平静を取り戻し

た。

スカートを軽くつまみ、首を横にかしげ、ニツコリと笑って挨拶。「なんだかしんねーけど、礼儀のいい子だて。おらそういうかしこまった礼儀っちゃしらんで、すまねーの。まあまあ、せっかく遊びにきなすつたんだ、ゆつくりしていきなせ」

言葉はわからないが、はにかむ老人の笑顔と、向かい入れるような態度に少女は安心する。そろりそろり部屋の中を歩いて、カタカタと回る機械を珍しそうに見た。

その後も窓からシアターの方をみたり、好奇心の向くまま部屋の中をあちこち見た。

「良かんば、なんか見てくかね」

おじいさんが始めに現れた場所でガサゴソと何かを探している。そこには映画フィルムがびっしりとしまい込まれた棚と、山のようにならぶ木箱があり、そこから何個かのフィルムを取り出して少女のところへ持って来た。

これは何だろと首をかしげて見る少女に『適当に選んだらええがね』と言って、持ってきた物を軽く持ち上げて見せるおじいさん。

少女はなんだか分からなかったけど、おじいさんが持って来てくれたもの指さした。

これかいこれかい、と少女が選んだフィルムを映写機へセットする。

熟練の技か、流れるように作業を進め、早速スクリーンへ映像を映した。

特等席だよと言って、クッションがボロボロになった丸いパイプの椅子を、スクリーンのよく見えるガラス窓の近くへ置いてあげた。そこに行儀よくちょこんと座る少女。

背筋を真っ直ぐ伸ばし、膝の上へ手を上品に置いた。

始まったのは動物キャラクターがコミカルに動くアニメ映画。フィルムが劣化していて、グレインやノイズが頻繁に映っていた。

映像も悪いし音声の言葉は分からないが、動物たちの動きや仕草

がなんだか面白くって、少女は夢中になってみた。映画が終わる頃にはおじいさんが用意した椅子から立って、窓に張りつくようにして見ていた。

幼い頃、女王の座に就く前はアニメなどの娯楽番組や映画を見ることもあった。

女王になつてからはそんな時間のゆとりも作れず、公務に忙殺されていた。

十歳の少女にとって四年、五年の歳月は非常に長く遠い過去のこと。

昔見たアニメも薄ぼんやりくらいにしか覚えていない。

初めて訪れた土地で、初めて入った建物で、初めて会ったおじいさんと一緒に観た映画。アニメを鑑賞したこと、それ以外にも何かドキドキする興奮とワクワクする楽しさを感じて、少女の顔は満面の笑みを浮かべていた。

おじいさんは上映の終わったフィルムを捲き戻しながら少女へ語りかけた。

「昔はこんな劇場でも週末になれば人でいっぱいになってたんだあ。あんたのようなちーっこい子もいっぱい来ててのお。映画を見終わる頃にはみーんな笑顔で、その笑顔がたまらんですーっつとさこの仕事を続けてきたんでよ。今じゃ、でじ鹿がどーのこーのでこんで汚ねーフィルム映画なんぞ興味ねって。なんだか寂しいこっちゃ」

おじいさんは更に続ける。

「ほんとはこの劇場もとっくに閉まってんだけど、おめーさんみてーな子供がたまに迷い込んできての、こーして今みたいに見せてやっと同じよーにニコニコ笑ってくれて、それを見んのがおらの生きがいなんよ。こいつら機械どもがいつでも動くよー手入れしてやんながら、いつ誰かこねーか待ってんだあ。お客さんひとりでも来てくれたらそんでもー十分だけの。一人でもおらんこと必要とおもーてくれる子がおんなら、又いつか見せてやりてーって思っんよ」

異国の少女は黙っておじいさんの話を聞いていた。

「どーつする。まだ観ていくけ？」

少女は首を横に振って、おじいさんの前を通って扉の前でブロードの髪を翻し、最初におじいさんに会った時のようにスカートを持って一礼した。

「そっか、けーるか。気をつけてけーれよ」

おじいさんは小さな貴婦人をエスコートするように重い鉄の扉を開いて、少女を外へと送り出した。

少女はぺこりともう一度礼をして、パタパタ走って階段を降りていった。

暗い廊下を通り、誰も居ないロビーを通り過ぎて外へ出た。

古い映画館を後にして少し歩くと、この小さな女王を探し回っていたお付の者に見つかった。小さな女王は逃げることなく、お付の者が用意した車に乗り込み迎賓館へ向かう。

その次の日からは女王は素直に公務に勤しみ、一時は大騒ぎになったものの以降はつつがなく予定の催しに参加した。

そして全ての日程を終え、小さな女王は日本を後にした。

あの時たどり着いた古びた映画館は偶然行き着いたものなのか。吸い込まれるようにして迷い込んでしまった和風ファンタジーの世界。

その世界をドキドキしながら冒険した。

そして出会った異国のおじいさん。

言葉もなにも分からないが、勝手に入り込んだ少女に親切にしてくれた。

そして何年かぶりに見たアニメ映画。

楽しかった。確かに楽しかったけど、今はもう内容をほとんど覚えていない。

あそこに居たとき、何かとても不思議な気がしていた。

高層ビルも立ち並ぶ都会の日本の街。

そんな中でひとときわ古い様相の建物。

そもそもあの建物は本当に存在していたのだろうか。

あのひと気の無かった建物で急に現れたおじいさんは本当に居たのだろうか。

日本を後にした飛行機の中で、ふとそう思ってしまった。

だけど、おじいさんが少女になにか話してくれていたことは覚えて
いる。

言葉は全く分からなかったけど、何かを想いを感じたような。

あの映画館が本当にあったのかどうか、今となってはもう確かめる術もない。

小さな女王は祖国へ着くまでの空の旅をゆるりと満喫した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1401w/>

小さな女王

2011年9月10日03時16分発行